



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/2031/



エリア

台北市

テーマ

歴史

建築

北投温泉博物館

日本統治時代、台湾最大の公共浴場

台北駅からMRT(地下鉄)で30分ほどのところに位置する北投は、その昔、台湾の先住民族ケタガン族の言葉で「巫女の住む地」を意味する「パッタウ」と呼ばれ、「草木は生えず、地は焼けるように熱い」ところとされていました。たえず温泉の湯けむりに包まれていたため、巫女が住む地と呼ばれていたようです。

北投の地には、日本の統治が始まって2年目の1896年、早くも日本人による温泉旅館が2軒開業しました。その後、1913年、北投温泉郷構想の一環として、台湾最大の公共浴場が建設されました。これが今の北投温泉博物館の前身です。

1945年、日本の敗戦により台湾から日本人が去った後もしばらく栄えていた北投温泉ですが、80年代以降は次第に廃れてゆき、公共浴場も長年放置され廃墟寸前になっていました。ところが、90年代になって、地元の小学生たちが郷土学習の授業で公共浴場跡を偶然発見し、その後の保存運動へと続けました。その結果、1997年には台北市の文化財に指定され、翌1998年に「北投温泉博物館」として生まれ変わりました。

学 び の ポ イ ン ト

1.

北投はどんなところ？

7世紀頃の北投は、先住民族とスペイン、オランダとの間で硫黄を中心とする交易が盛んに行われていました。陶磁器の原料となる白瓷土、畳表の材料となるイ草、城壁にも用いられた岩石などが採れ、北投石の産地としても有名な北投で、温泉の開発が始まったのは19世紀末の日本統治時代に入ってからです。特に、1913年に公共浴場が完成すると、入浴施設や旅館が立ち並ぶようになり、鉄道の支線が建設されて新北投駅ができると、より多くの人々が訪れるようになりました。夏には納涼祭が行われ、北台湾有数の歓楽街にまで発展したのです。戦後、しばらくして廃れてしまった温泉街ですが、21世紀に入り地域再生プロジェクトが始まり、今では多くの入浴施設や旅館、ホテルが立ち並んでいます。日本でもよく知られた温泉旅館も進出しており、ミシュランガイドの三ツ星観光地に選ばれています。

2.

北投温泉博物館の建物の特徴は？

台湾総督府などの設計を手掛けた建築家森山松之助によるもので、レンガと木材が使われ、屋根は黒瓦で葺かれた和洋折衷の美しい建物です。1階には大浴場と個室の浴場、2階には風呂上がりの人々がくつろげる畳敷きの大広間があります。1階の古代ローマ風の大浴場は、両側にステンドグラスがはめ込まれた窓があり、アーチ型の回廊に囲まれています。湯面にステンドグラスを通過した陽光の光がキラキラと反射する小さなプールほどの大浴場は、深さが40cmからだんだん深くなり、最も深いところでは130cmほどになるため、深いところでは「立ち湯」だったとのこと。50～60人程度が一度に入浴できたようです。

3.

日本統治時代、北投温泉はどのように楽しまれていた？

開発当初は、湯治客や日露戦争当時、傷病兵が傷の手当のために逗留する場(陸軍療養院)が作られたほか、軍や政府高官、豪商たちの保養施設としても利用されていました。その後、じょじょに日本文化が持ち込まれ、軒を連ねる日本人相手の温泉旅館には芸妓や流しの歌手が現れ、日本の温泉街のようなにぎやかな夜の街になりました。1913年に北投公共浴場が建設されてからは、夏に大規模な納涼祭が催されるようになりました。この納涼祭は、2019年から「北投納涼祭」として復活しています。